

第2回 淀川左岸線（2期）事業に関する技術検討委員会 委員からの主な意見

■ 現象の同時生起への対応について

- ・ 洪水と地震の同時生起よりはむしろ、経年変化と洪水や、経年変化と地震といった構造物自体の劣化を考慮すべきである。
- ・ 通常の堤防では同時生起までは考えないが、特殊な構造であるため同時生起の際の現象を知っておくことも考えの一つである。
- ・ 豪雨・洪水により堤体内が高い含水状態の時に、地震が起こることも想定されるため、同時生起を考えておく必要がある。なお、堤体内の水位や一体構造物上の舗装による遮水との関係に留意すること。

■ 堤内側から河川へのアクセスについて

- ・ 鉄道橋などが堤防と交差しているが、堤内側が冠水している場合でも、堤防の点検ができるようなルートの確保が必要である。
- ・ 左岸線が整備されると、従来の堤内地から河川へのアクセスが難しくなるが、その機能は確保することが必要。内水氾濫があれば、堤防上が避難場所になる。
- ・ 堤防の復旧作業時に建設重機が通行する側道や坂路を、左岸線の整備に併せてどこに設置するかを考える必要がある。

■ 越水時の対応について

- ・ 河川堤防上に設けられるトンネルの出入路からの河川水の流入の危険性について検討し、必要に応じて対策について考えておくこと。
- ・ 津波による越水に対しては、通行止めやユーザーへの情報提供などができる体制づくりを考えて欲しい。

■ 圧密沈下について

- ・ 縦断方向のボックスの継ぎ手部については、長手方向に様々な構造パターンがあると不同沈下の発生が懸念される。継ぎ手部は可撓性の構造とすることも考えられる。

■ 耐侵食について

- ・ ボックス上の覆土が豪雨によって流出することで、ボックスが浮き上がるなどの被害を想定しておく必要がある。

■ 耐震の照査について

- ・ 堤体盛土部と基礎地盤との間に生じる部分的な液状化に注意する必要がある。

- ・ ボックスが段になっているところは地盤の支持力が違うため、ボックスが回転するような変形パターンが想定される。施工時にはひずみ、支持力をどのように改良するかがポイントである。

■ その他

- ・ 非常時には、約 4 kmのトンネル区間のどこから利用者が脱出するかを考える必要がある。
- ・ ボックス内が浸水した時には、どのような排水を行うのか検討が必要である。
- ・ ボックスの施工時の盛土の締め固め、コンクリート強度などの品質管理についても意識すること。
- ・ 景観や普段の利用に配慮することも重要である。

以上